

## ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(9)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月27日に行われたウィーン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Der Standard  
February 28, 2020

### NHK交響楽団、ブニアティシヴィリがコンツェルトハウスを魅了 パーヴォ・ヤルヴィの指揮でベートーヴェンとブルックナーを演奏

クラシック音楽におけるヨーロッパとアジアの貿易収支は、ヨーロッパが大幅に輸出超過となっている。それに対抗するのがNHK交響楽団である。コンツェルトハウスでの公演はパーヴォ・ヤルヴィの指揮でベートーヴェンとブルックナーであった。極東の交響楽団による前奏曲からも、既にヨーロッパのインスピレーションを受けていることが聴き取れた。武満徹の《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》はうっとりさせるようにドビュッシー、マーラー、コルンゴルトの音の世界に順応していく。日本のこのオーケストラはベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第3番》を物憂げで、弛緩したなめらかな演奏で導入。高貴で魔性の世界を支配する星の輝きに満ちたカティア・ブニアティシヴィリは自らの楽器に即刻融和し、綿のように柔らかく快い響きは聴覚を夢中にさせ、独特の腕の動きは視覚を魅了した。荒々しい激しさは巧みに調合され、カデンツァにおいてこのパリ在住のジョージア人は初めて完全に“抑制から解放”されたかのように演奏した。この女性はピアノに向かうと全てを可能にする。どの音も感性に満ち、抜け目がなく、そして独特だ。

### 長すぎる3時間

アンコールとして、ブニアティシヴィリはシューベルトの《即興曲 変ト長調》を演奏したが、不可解なことに最後の部分のみである。おそらく、32歳の彼女はコンサートが3時間以上続いては長すぎると思ったのだろうか。残念ながら、この非凡なアーティストは、ブルックナーの《交響曲 第7番》の演奏には加わっていない。ヤルヴィはこの大作を巧みに挙行し、日本のオーケストラの演奏は印象的であったが、管楽器の小さなミスが多かったのが残念であった。アンコールではシベリウスの《悲しきワルツ》が演奏された。